

# Risks of Mortality and Airflow Limitation in Japanese Individuals with Preserved Ratio Impaired Spirometry

鷺尾, 康圭

<https://hdl.handle.net/2324/6796061>

---

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (医学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International

氏名： 鷺尾 康圭

論文名： Risks of Mortality and Airflow Limitation in Japanese Individuals with Preserved Ratio Impaired Spirometry

(日本人地域住民におけるpreserved ratio impaired spirometryと死亡および気流制限のリスクについて)

区分： 甲

### 論文内容の要旨

背景：呼吸機能検査でpreserved ratio impaired spirometry (PRISm) を有する者は、気流制限 (Airflow limitation、以下AFL) や死亡のリスクが高いことが複数の欧米の研究で報告されている。しかしながら、東アジア地域の人種や民族におけるエビデンスは乏しい。

目的：日本人におけるPRISmと死亡およびAFL発症との関連を検討すること。

方法：40歳以上の日本人地域住民3,032人を対象に、毎年呼吸機能検査を行い、中央値5.3年の追跡調査を行った。研究参加者を調査開始時の呼吸機能パターンにより以下のように分類した：呼吸機能正常群 (1秒量/努力性肺活量0.70以上かつ対標準1秒量80%以上)、PRISm群 (1秒量/努力性肺活量0.70以上かつ対標準1秒量80%未満)、AFL Global Initiative for Chronic Obstructive Lung Disease (GOLD) 分類1群 (1秒量/努力性肺活量0.70未満かつ対標準1秒量80%以上)、AFL GOLD分類2~4群 (1秒量/努力性肺活量0.70未満かつ対標準1秒量80%未満)。ハザード比および95%信頼区間は、コックス比例ハザードモデルを用いて算出した。

結果：追跡期間中、131人が死亡し、うち22人が心血管病で死亡した。また、218人がAFLを発症した。調査開始時の呼吸機能分類毎の予後を検討すると、PRISm群は、交絡因子を調整後も呼吸機能正常群に比し、総死亡 (ハザード比2.20; 95%信頼区間 1.35-3.59) および心血管病死亡 (ハザード比4.07; 95%信頼区間 1.07-15.42) のリスクが上昇した。さらに、PRISm群におけるAFL発症リスクは、多変量調整後も呼吸機能正常群に比べ高かった (ハザード比 2.48; 95%信頼区間1.83~3.36)。

結論：日本人においてPRISmは総死亡および心血管病死亡のリスクが高く、AFL発症のリスク上昇と関連していた。